

第一部 中世写本の時空

1, 政治的・外交的関係の証としての中世末期の写本

ハンノ・ウエイスマン(フランス国立文献史研究所―フランス国立科学研究センター研究技術補佐員)

中世の写本は、当時の知や文化のありよう、あるいは知識がいかに伝播したかを物語る。また、しばしば贈物とされていたことから、写本が社会的・政治的関係を物語るものでもあることも窺える。実際、印刷技術が到来する以前に書物が唯一無二の存在であった頃、写本は貴重な贈物となりえた。というのも大きさ、素材、彩飾、金箔や装丁等によって貴重品となるだけではなく、入念に検討された意味内容を伴うものでもあるからだ。本発表では、中世末期の西欧における政治的・外交的関係の証となる彩飾写本のいくつかの顕著な例を紹介したい。15世紀のフランス、イングランド、ブルゴーニュ(その後継者としての1477年以降のハプスブルク家を含む)は、西欧における3大勢力をなしていたが、フランス王、イングランド王、ブルゴーニュ公は緊密に結びついている一方、激しい競合関係、さらには度々戦争状態にあった。

様々な先行研究が、中世末期における書物の贈与が一方向の儀礼であったこと、つまり常に社会的地位の高い者へと贈られていたことを明らかにしてきた。大貴族が主君に書物を献呈することはあっても、その逆はありえなかったのだ。王族や君主は、その子や伴侶、そして兄弟姉妹といった親族にのみ書物を与えていた。

ブルゴーニュ公国の宮廷の大蔵書家の一人に、グルートゥーズの領主ルイ・ド・ブリュージュ(1427頃～1492)がいる。ブルゴーニュ公家＝ハプスブルク家対フランス王国間の緊張関係に加え、後者にはハプスブルク家のマクシミリアンに対抗するフランドルの諸都市が連なるという複雑な政治背景のもと、1489年7月にマクシミリアンとフランス王シャルル8世との間に休戦協定が締結される。フランス王がマクシミリアンと、彼に抗するフランドル諸都市を仲裁したのである。その翌月、交渉に参加するため、ルイ・ド・ブリュージュに率いられたフランドル諸都市の外交使節団がトゥールにあるフランス宮廷に赴いているが、その際、ルイからシャルル8世にルネ・ダンジューが編んだ『馬上槍試合の書』の彩飾写本が献呈されている。この贈物は、このフランドルの領主が制作させた二点の写本のうちのひとつであったため、彼の蔵書の重複本をなしていたともいえる。献呈するにあたり、彼はフランス人画家に描かせた扉絵を付け加えさせている。この贈答は、彼自身の優位性を示すものでもあった。というのも、この写本は馬上槍試合の書というだけでなく、1392年にブリュージュで開催された馬上槍試合に関する記述を含んでおり、そこでの勝者はルイの父グルートゥーズのジャン4世だったのである。

かかる典型例に加え、本発表を新たに発見された例で締めくくるために、他のいくつかの例にも触れることとなろう。ブルゴーニュ特有の文学作品『ジャック・ド・ララン武勲録』は、ブルゴーニュ公フィリップ善良公の宮廷に仕えた一人の英雄の騎士の伝記である。この作品は、英雄ジャック・ド・ララン(1420頃-1453)の一族以外には殆ど知られることがなかったが、その彩飾写本の一つはイングランド王エドワード4世の右腕であったウィリアム・ヘイスティングスのために制作されている。本報告において、この写本がマリー・ド・ブルゴーニュとその夫マクシミリアンを介してイングランド王との協力を推進した、ブルゴーニュ宮廷の貴族たちからの贈物として注文されたことを提案したい。

特定の外交的・政治的状況における写本の贈与は、結果を伴わないことが多く、ときには実現にすら至っていないこともある。しかし、それらの存在は、当時の政局における立役者の意図に関して何がしかの情報を与えてくれる。

(佐藤龍一郎 訳)

2, 西欧中世の図書館 ―場所、実践、記憶―

トマ・ファルマーニュ(ルクセンブルク国立図書館研究員)

1602年、ユマニストのユストゥス・リプシウス(1547-1606)は『図書館について *De bibliothecis*』の冒頭で、《bibliotheca》を次のように定義している――「bibliotheca とは書物を保管する場所、書物を整理して置く棚、蔵書を意味する*」。本報告は、これら3つの概念を中心に検討する。

1. 図書室の正確な場所は時期により異なるが、9世紀にベネディクト会が始めたひとつの平面図・様式があり、そこには書物を所蔵するためのスペースが用意されている。14世紀以降は個人所蔵の書物の増加に伴い、新たに書物のためのより私的な保管場所に関する記述が史料にみられるようになる。

2. 中世においては主に手稿本が扱われていたわけだが、専門的図書係はほとんどいなかったため、図書館や図書館学に関する言説が少ないのは当然である。しかしながら、中世の手稿本と中世に編纂された蔵書目録という2種の史料から当時の図書館学の実践が透けて見えてくるのである。書物に付された整理番号、蔵書記録(蔵書標)、呪詛といった具体的な手がかりによって、中世人が読んでいたテキストや保持していた蔵書への関心が浮かび上がる。

3. つまるところ書物は、書写されたり所蔵されたりすることによって、それを読み、書き写し、内容を理解することに意義や含蓄を与えているのである。それらが共同でなされたか、個人でなされたかは問題ではない。かかる事象にたいして歴史家はまず、数量的手法でアプローチしている——テキストやその写本はどの程度、いつ、いかなる読者のために入手されたものなのか？中世ラテン世界の図書室における手稿本の収集状況を把握できるような「文化的地図」を描くことは可能なのか？そして、このような方法を通して図書係の意識を離れて解釈される「書物の記憶」とはどのようなものになるのだろうか？手稿本に整理番号や蔵書票を添付したり、蔵書目録を編纂するといった当時の図書館学的実践は、一時的な処置である場合がほとんどであるから、長期にわたるこのような「書物の記憶」に言及できる機会は希少である。

※《Bibliotheca tria significat, *Locum, Armarium, Libros*》. Juste Lipse, *De bibliothecis syntagma*, Antwerpen : J. Moretum, 1602, p. 9 [gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k6529064p/f9/].

(島崎利夫 訳)

3. 犬を用いたマンドラゴラの採取法？—古代・中世ヨーロッパ、中東、中国におけるモチーフの往還

第1部 ヨーロッパの写本におけるマンドレイク——テキストと図像の相関性

イザベル・ドラーランツ(フランス国立文献史研究所—フランス国立科学研究センター研究ディレクター)

第2部 中東写本におけるマンドレイク描写

山中由里子(国立民族学博物館教授)

2017年11月に奈良で開催されたメネストレル主催の国際シンポジウム以来、イザベル・ドラーランツと山中由里子は、マンドレイクに関する知識がユーラシア大陸の西から東へと伝播した過程についての比較研究を共同で行ってきた。犬を用いたマンドレイクの採取法(古代ギリシアあるいはメソポタミア起源)に焦点を当てることで、この伝承が中東を経由して中国まで伝播する過程を明らかにしている。

本報告では、この東西の伝承を歴史的な脈絡の中で結び付け、知識の交流が行われていた古代末期と中世における接点の検討を試みる。また、東西の写本にみえるマンドレイクに関する挿絵の伝統についても比較したい。

今では希少となった地中海地方原産の植物マンドレイク(*Mandragora officinalis*)には、伝説化につながるいくつかの特徴がある。それは芳香が強く、引き抜かれる際に鋭い音がする。その果実は直径3~5cmの球形、橙色で光沢がある。根は24cm以上に達するため、引き抜きにくい。さらに、幻覚、麻痺、催眠、抗コリン性の各作用をおよぼすことに加え、根が人型であるため古代から人々をひきつけ、その植物学的記述やこの植物に関する不思議な物語が世界中で何世紀にもわたって蓄積されてきた。その性質や採取に関する伝承の語りは驚異譚として、元の逸話にあった要素を核として筋立てを多様化し発展させ、広く伝播した。マンドレイクの採取に関する図像や伝承の伝播経路は複雑を極めるため、ある証言の元の作者や、テキストやその内容の出典の特定においては、近代の「驚異」文学集成や史料編纂においても誤認や混同はつきものであった。

これらの描写の系譜を辿るには、初期の証言や図像表現に立ち返る必要がある。本報告では、犬にマンドレイクを採取させるという特徴的なモチーフに焦点を当て、古代から中世にかけての文化間伝承を辿る。犬による採取に関する最初の記述は1世紀のフラウィウス・ヨセフスに確認されており、その影響はヨーロッパや東洋の様々な文学、植物学関連のテク

ストに見られる。さらに、5世紀以降は、採取の特殊な工程の説明を必ずしも伴うことなく、マンドレイクという植物のそばに犬を描く図像表現がみられる。その逆もまたありうる。つまり、そうしたテキストや図像がいつ、どこで誕生し、それらが異なる言語や文化の中でどのようにして結び付けられ、交わり、流布していったのかを明確にする必要がある。

そのために、一次資料と、犬を用いたマンドレイクの採取のモチーフを扱った初期のテキストおよび図像の系譜について検討したい。実際、このモチーフはさまざまな民話の中にひとつの重要な系譜をなしている。イザベル・ドラーランツは古代のマンドレイクに関する植物学的・民俗学的知見を主な資料として、キリスト教徒とムスリムの間には伝わった伝承の起源を考察する。これにより、それぞれ伝承に固有な特徴を識別しながら、中世ラテン語やアラビア語の著作物におけるマンドレイクの植物学的、薬学的知識の相互関係を証拠立てることができる。また、ディオスコリデスの『薬草誌』に関する5世紀の「ウィーン写本」以来、西洋中世の写本に認められる犬による採取というモチーフの図像表現についても言及する。

一方、山中由里子は、東洋の諸言語によるマンドレイク関連の多様な表現を研究することにより、それらが中東から中国へと伝播する軌跡を辿った。その結果、アラビア語(イブン・バイタルの重要な証言を含む)、ペルシア語、中国語、日本語のテキスト中に事例が認められ、植物学に関する著作から芝居(バヌー・サーサーンを扱ったもの)や民話の中へと取り込まれていったことが明らかとなっている。本発表では、アラビア語・ペルシア語写本における図像に関しても触れる。以上の結論として、このモチーフの伝播の経済的、物質的、あるいは政治的背景を明らかにする。

(島崎利夫 訳)

第二部 「中世における文化交流」再考

イントロダクション: 「中世における文化交流」の多様性と多義性から見えてくるもの

田邊めぐみ(帝塚山学院大学兼任講師)

中世における文化交流が研究主題とされる際、異文化を受容する側の主体性が問われるようになって久しい。しかし受容した側から発信側への反作用性については、未だ十分に論議されていない。無論、かかる視点が全く看過されてきたわけではないものの、それらは概して一方の文化の理解不足による過大解釈であったり、「相互作用」という名のもとに、片方における異文化受容の際の志向が検討されるに留まっている。そして、かかる傾向が、一方の異文化受容の在り様は反作用の結果としておこり得る他方側のものと同一であるはずだという認識に基づいていることには、警鐘を鳴らす必要があるように思われる。

グローバル化がすすみ、人、モノ、情報の移動が加速した現代においても、依然として類似した価値観や慣習を共有し、共属意識を持つ様々な単位の集団(文化)が併存している。そして、各々の頻繁な接触や複雑な絡み合いが多く、衝突を生んでいることは、その必然の帰結ともいえる。かかる状況下、他者の文化を構造的に把握したり、異文化がいかに受容されたか、あるいは異なる文化間の「交渉」の様態を検討するだけでは事足らず、複眼的に他者を捉える手段がますます必要になってきているように思われる。無論、このような問題が果たして狭義の「中世」という枠組みの中で論じ得るのか否かという問題を孕んでいることは認めざるを得ない。しかし、多様な権力がそれぞれ自律性を失わずに錯綜していた中世の様態が、多極化した世界システムをもつ現代に重ね合わされることもあることを踏まえれば、他者との多様な結びつきによって互いを変化させていたことを中世における文化交流から浮き彫りにする意義は少なくなかろう。そのことは、国民国家の枠組みを基礎にした近代の諸科学が限界に達し、新たに提示されているグローバルヒストリーもまた、部分と全体との有機的な繋がりや、現代における諸問題との接点を見出せずにいる現実を前に、特に大きな意味をもつのではあるまいか。

そこで本イントロダクションでは、共通点が多いがゆえに比較対象とされることの多い、中世の日本と西欧を対象とした島尾氏と小澤氏のご発表を前に、2017年に開催された国際シンポジウム《中世における文化交流—対話から文化の生成へ》の成果論文集『東西中世のさまざまな地平—フランスと日本の交差するまなざし』で提示された様々な「中世におけ

る文化交流」のかたちや論じ方を概観した上で、「文化交流の相互性」が各分野や各研究テーマにおいていかなる意味をなすのか、そして今論じるべき、あるいは論じ得る「中世における文化交流」のあり方を改めて問うてみたい。

1, 中世における相互交流は可能か？ 日本美術史の場合

島尾新(学習院大学教授)

「国民国家」を単位とした歴史語りが批判されて久しい。その「境界」をこえる試みとして、日本美術史の場合は、まずは「東アジア」へという動きになっている。基本的なイメージは、とりあえず文化空間としての「諸地域」を設定し、そのネットワークのなかを「人」と「美術品」という「もの」とが動くというものだろう。

私に与えられたテーマは、そのようななかでの日本と中国との「文化交流」における「双方向性」である。事例としては、紙扇が平安から室町、中国では宋から明にかけて日中のあいだを行き来しながら発達し、また「渡唐天神」が寧波と日本のあいだを往復しながら図像を形成したことなどが挙げられるが、その数は少なく「交流」のごく一部をなすにすぎない。

周知のように、日本にとっての中国文化は、いわゆる「異文化」ではなかった。現在の私の立場は、むしろ「共有」をキーワードとして、東アジアの諸地域のなかで、何がどのように共有され、変容してゆくのかを観察する方がよいだろう、というものである。そのなかで個々の「地域」の特質と、他の地域との「接続」の様態も浮かび上がらせることができると思う。

本発表では、日中間の交流が極めて盛んだった十三・四世紀——日本では鎌倉・南北朝期、中国では南宋・元代——における禅宗を中心とする仏教と関連する絵画を取り上げる。この時期には数多くの僧が日本から中国へ渡った。長期滞在者も珍しくはなく、中国の寺院の住持になった者もあり、杭州や寧波やなど江南における彼らの活動には、中国側から見てもめざましいものがあった。中国からの来朝僧もかなりの数にのぼり、鎌倉にはほぼ中国そのままの禅院が出現している。その一方で、京都では新来の禅は排斥され、「三宗兼学」という中国とは異なるかたちを取るものが現れる。その様相とそれを反映した絵画を略述して、提起された問題についての議論の材料を提供したい。

2, 中世における文化交流は可能か？ 中世アイスランドにおけるビザンツ帝国の記憶再考

小澤 実(立教大学教授)

本報告では、社会における記憶と想起という観点から中世の文化交流のあり方を考えてみたい。

9世紀にルーシと呼ばれるスカンディナヴィア系集団がビザンツ帝国の首府コンスタンティノープルに接触して以来、両地域の関係は次第に緊密となった。スカンディナヴィア人は、略奪者として、商人として、傭兵として、様々なかたちでミクラガルドと呼ばれた巨大都市から富を得ようとした。とりわけスカンディナヴィア本土に建立されたルーン石碑には、ビザンツ帝国の富を求めて冒険行に出立した一軍のヴァイキングの存在を確認することができる。その後も1204年のコンスタンティノープル占領まで、スカンディナヴィアとビザンツ帝国の関係は持続した。

このようなヴァイキング時代におけるスカンディナヴィアとビザンツ帝国の記憶は、スカンディナヴィア本土では徐々に忘却される一方で、僻遠のアイスランドにおいては、現地語で記された歴史＝物語であるサガの一ジャンルとして記憶され、伝承され、文字テキストとして14世紀に記録された。14世紀のアイスランドでは、祖先たちの華やかなビザンツ帝国での記憶が想起可能な形で共有されたのである。

本報告では、以下3点を考えてみたい。

- 1) ヴァイキング時代の文化交流とは何か？
- 2) ヴァイキング時代の記憶がどのようにして中世アイスランドに伝えられたのか
- 3) ヴァイキング時代と中世アイスランドの文化交流の違いは何か？

第三部 国際日本学を拓く—日仏翻訳の諸問題

司会: 江川温(佛教大学教授)

1, 日本文化を翻訳する——大和文華館特別企画展《書の美術——経典・古筆切・手紙》の展示作品解説書の事例から

島崎利夫(東京大学博士課程)

日仏翻訳という作業の前にするべきことの一つに、対応する語彙の存在や用法の確認が必要であることは言うまでもない。日本語すべての時代を網羅する辞書としては、中断された『時代別国語辞典』(三省堂、上代編 1967、室町時代編 1985-2001)や、『日本国語大辞典』(小学館、初版 1972-1976、第2版 2000-2002)がある。しかし、そこに十分な情報がない場合は、各種の専門用語辞典だけでなく当時の文献自体や古辞書類も探る必要があるだろう。他方、フランス語側をみると、『フランス語語源辞典』(FEW)、『古フランス語語源辞典』(DEAF)、『中期フランス語辞典』(DMF)、『中世フランス語辞典』(Mts)、『フランス語宝典』(TLF)や『9-15世紀のフランス語・全地方語辞典』(Gdf)、『古フランス語辞典』(TL)、『16世紀フランス語辞典』(Hu)などがあり、さらに世界の各フランス語圏の辞書類もある。

専門用語については、日本の花道、茶道、鞠道、謎のような類の語彙、あるいは料理書に見える食材や調理法の語彙は、大型の辞書でも未収録の場合があるため、日仏間の語彙の正確な適合関係を見つけることは困難である。しかし、例えば、プリニウスの『博物誌』、李時珍の『本草綱目』、寺島良安の『和漢三才図会』のような百科全書的著作は豊富な語彙を収録しているので、比較参照によって対応する語彙が見つかる場合がある。また、仏教説話が聖者伝の形で中世フランス語文献に伝承されていたり、江戸時代にオランダ語から翻訳された文献の原典が実はフランス語文献であったこと、また、医学や薬学では薬成分の性質や薬効の記述については東西の文献に共通する部分があることに気づくことがあり、意外なところですでに語彙の対応を検討した先人がいたことを間接的に発見する場合もある。

大和文華館の特別企画展《書の美術—》の展示品解説パンフレットのフランス語版は、2017年11月に大和文華館で開催された国際シンポジウム《中世における文化交流—対話から文化の生成へ》のためにヨーロッパから来日した研究者を案内する目的で作成したものである。ただし、この作業は当館学芸員の古川攝一氏から事前に提供された情報に基づいてはいるものの、展示作品を事前に見ることができないまま訳語や訳文を考えなければならないという困難な状況の下で行われた。その準備にあたっては、国立博物館所蔵の国宝・重要文化財に関するサイト「e 国宝」[www.emuseum.jp/]のフランス語版も参照したが、訳語の不統一に多数出合い、訳語のない場合は説明的な文章を作る等、専門用語の翻訳の難しさを改めて確認することになった。本報告では、語彙収集ための基礎的作業を概観した後、翻訳の際に直面した問題とその対処法について、「海鼠」、「墓股」、「法華経」、「変成男子」、「(卷子本の)見返し」、「誓書状」等、若干の事例を挙げることで、日仏翻訳における諸問題を参加者と共有することを目的とした。

2, 日本学研究成果の日仏翻訳における問題

室崎知也(独立研究者)

発表者は国際シンポジウム《中世における文化交流—対話から文化の生成へ》において、ジャック・ベルリオーズ氏(フランス国立社会科学高等研究院—フランス国立科学研究センター研究ディレクター)の「中世における東洋の教訓物語—データベース ThEMA (Thesaurus Exemplorum Medii Aevi, 中世教訓逸話集シソーラス) 索引化のための批判的・比較論的アプローチ要素」という東西文化交流に関する総論的論文の翻訳機会を得た。中世教訓逸話集 Exempla 研究を長らく牽引してこられた、同氏によるエクセンプラ研究の翻訳に携わるものと発表者は引き受けた段階で思っていた。ところが氏の論文は「ThEMA」という、氏が中心となって開発した、11897話(2019年現在)に及ぶ東西の中世教訓逸話を集録したデータベースを活用し、西洋のエクセンプラや聖人伝と『今昔物語集』のような日本の説話集、さらには大蔵経典や中国の禅僧伝記集といった聖教テキストとを縦横に駆使し、信仰と教育に関わる物語テキストの東西比較研究の可能性を提示するものだった。それは発表者の予想に反して、デジタル・ヒューマニティーズや人間と動物の関係史、そして日本中世史・中世文学・仏教学など多岐にわたる内容のものだったのである。本報告では、西洋中世説教・エクセンプラ

の在野研究者である発表者が、フランスの西洋中世学者による、フランスにおける日本学研究に基づいた日仏比較論文の翻訳に当たって、どのようなやりとりを交わし、どのような作業を行ったかを紹介していく。そしてその翻訳作業から、日仏の学術翻訳交流の可能性について触れていく。

3, 人文学の国際化・学際化とフランス文学研究者:使用言語の問題を中心に 黒岩卓(東北大学准教授)

本発表は、人文学の国際化・学際化の流れのなかで、外国文学研究者にもとめられる対応の事例について、発表者の近年の試みの事例の幾つかを通じて紹介することを目的とする。

発表者は2016年より、グルノーブル・アルプ大学教授(当時)であったエステル・ドゥーデ氏と、相互の所属機関の人文学分野における学生・教員間交流を行うため、毎年一度のペースで国際ワークショップを企画している(現在これら一連の交流には「TOGA」の名が冠されている)。最初の試みを行う際に発表者にとって大きな課題となったのが使用言語の問題である。フランス語を教える身としてはフランス語の使用を推奨すべきところだが、フランス語・日本語を必ずしも解さない人々を含めた学際的な交流の場を作ろうとすれば、どうしても英語の使用が必要になるからである。

その後、このワークショップは東北大学で2019年度より正式に開講された日本学国際共同大学院(GPJS)の一連のワークショップ企画に組み入れられることになった。同大学院プログラムは欧州を始めとする海外の諸大学をパートナーとする大学院プログラムだが、使用言語は基本的に英語であり、イタリアやドイツの諸大学で企画が行われる際にも媒介言語は英語となる。この媒介言語の一元化は、多様性という観点からすればマイナスだろうが、その一方で学生の教育や教員の学術交流という点では利点も多い。他方でこれら一連のプロジェクトに関わる中で、発表者は日本におけるフランス文学研究、とりわけ中世フランス文学研究の存在を、日本の近代化プロセスという視点から眺めるようになった。結果としてフランス語フランス文学の研究・教育についても歴史的に俯瞰するような展望を抱きつつある。

人文学の国際化・学際化が今後も進むことを前提とすれば、英語を媒介言語として使う必要は所与の事実として受け入れる必要がある。その上で、今後は英語をどのように「国際語」として鍛えていくか(羽田正)を考える必要があるだろう。それと同時に、日本語やフランス語といった言語の遺産を維持・発展させることは、各国の教育・研究レベルを底支えていく上でも極めて重要である。学術上の「国際語」としての英語の存在を認めた上で、各言語を学びそれを研究の場で使用する必要性・必然性(誰のため?何のため?)を明確に意識していくことが必要なのではないだろうか。

第四部 文化と分野の交差点から生まれ出づるもの

1, 「幻想の中世」と近代の日仏交流—中世学と東洋学のネットワーク 藤原 貞朗(茨城大学教授)

フランスの中世美術を専門としたアンリ・フォション(1881-1943)とユルギス・バルトルシャイティス(1903-1988)は日本美術に親しむと共に、日本人研究者と親しく交流していたことが知られている。その理由を紐解くことで、中世の東西文化交流の研究を通じた、近代の日仏文化交流の系譜を明らかにすることができ、本発表の目的である。

鍵となるのはバルトルシャイティス著『幻想の中世 ゴシック美術における古代と異国趣味』(1955)である。そこでは中世からルネサンスにかけて西欧に出現した奇怪な図像の源泉が、東洋の図像に辿られている。日本美術に造詣が深かったわけでも、来日経験もなかった彼が、かかる論考を完成させたのは、その師フォションが1910年代以降、日本美術の研究や西欧絵画との比較を意欲的に行っていた影響によるものと考えられる。しかしさらに巨視的に見るならば、フランスの東洋学者による東西文化交流の研究が重要な要素として立ち現れてくる。それは、まさしく「西欧とアジアを隔てる「壁」などなく、いかなる時代であれ、両者が活発な関係を取り結び、相互に影響を与えあってきたことを知らしめる」ものだった。

「西洋と東洋の接近」を志すフランスの東洋学者達はまた、日仏学術交流の発展に大きく寄与している。彼らとの親交を紹介してフランスに留学した吉川逸治が、ロマネスク研究に従事するかたわら、アフガニスタンの調査に参加するなどし、帰

国後は東西美術の比較研究にかんする豊かな成果を発表しているのは、その成果の一つといえるだろう。日本美術史家である秋山光和がフランスに留学することになるのもまた、彼らとの交流が契機となっている。そして彼らの後に、互いの美術文化を学び合う日仏学术交流の道が大きく開かれることとなった。かかる壮大なネットワークの源泉こそが、東洋学を介した東西の「幻想の中世」とはいえまいか。

総括：西洋中世学の未来への提言（稲賀繁美，国際日本文化研究センター教授）